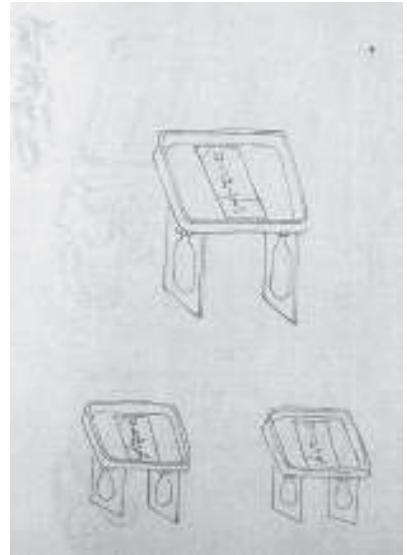
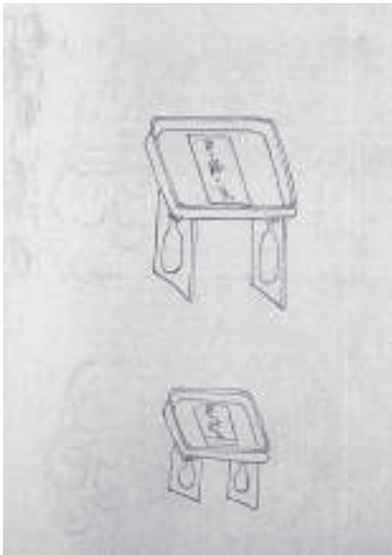


内侍所
「白銀四拾目」
「白銀五匁」
「白銀四拾目」
「白銀五匁」

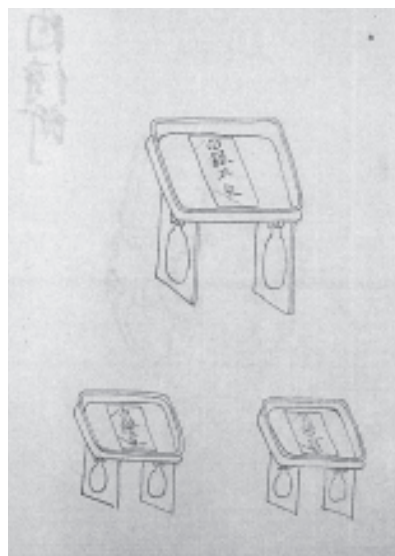


青森県立郷土館 〒03008021
青森市本町二丁目八番四号

青森県立郷土館 研究主幹
竹村俊哉
青森県立郷土館 主任学芸主査
本田 伸

（帳末）

八戸
御留守居



一、棗御長持 外のり 長サ貳尺三寸五分

但惣檢板 巾壹尺四寸 高サ壹尺貳寸

屋根そこ板 峯高サ三寸八分 足高サ貳寸

惣椽六分板 屋板出

但老枚板 長サ貳寸五分宛 巾老寸八分宛

棹長サ七尺 屋根蝶違ひ三枚 但惣黒懸合塗

御絵符

長サ老尺三寸 巾 三寸八分 柄 老尺八寸

一、口宣入外家箱 但椽柱目板、

外のり

長サ 老尺九分 巾 八寸六分 深サ 七寸

蓋がわ老寸

但屋郎蓋、鉄金物鎖前付、

一、口宣入内箱 真田本紫丸打紐付、

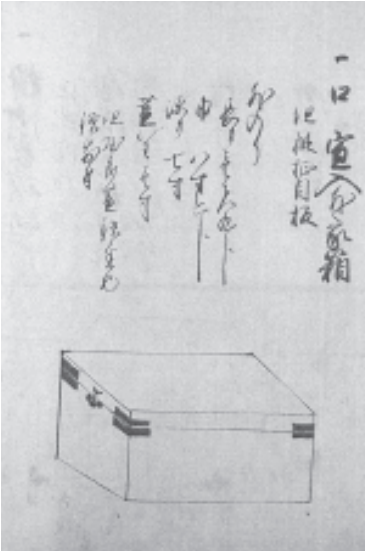
但嶋桐屋郎蓋、裏戸面取、 煮黒味鉞付、

長サ 老尺六寸 巾 五寸 深サ 貳寸五分

蓋かわ高サ七分 但し寸法内のり、

一、口宣入外箱 但中嶋桐台指箱、

内のり 長サ老尺七寸 巾 六寸老分 深サ老寸三分



*2 *1 「鉄金物鎖前付 外柱 九分角 中貫 巾七分 厚サ 貳分半」 どの台とら付 中柱 七分角

*1 *2

新侍賢門院御方
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」

「白かね三まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」

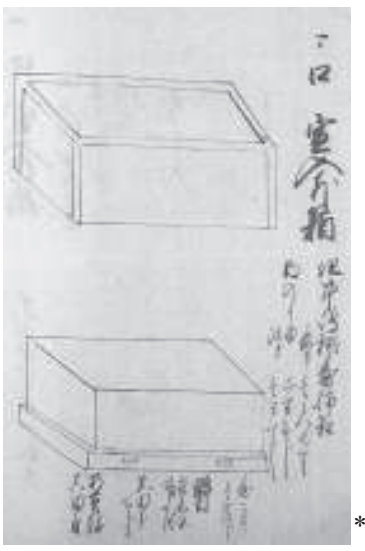
「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」

准后御方

「白かね一まい」
 「白かね一まい」
 「白かね一まい」

禁裏御所
 「黄金壹枚」

*3 「台高サ老寸貳分 真田巾七分 萌黄絹真田付 鴨目 煮黒味丸座」



*3

正月廿八日

一、今朝六半時出立、口宣守護、佐屋廻二而、道中十三日積江戸へ罷下候事、

但口宣入梓長持足付通人足・足輕小頭・平足輕左右へ付添、夜番・不寝番心得候事、

二月九日

一、永田右膳・下斗米吉太夫口宣守護、道中無滞、今日七ツ時過品川駅へ着候事、

一、明朝何時頃御屋敷へ着可然哉之旨御留守居方并御目付へ永田右膳より飛脚を以申遣候處、四ツ時頃御屋敷へ着致候様申来候事、但迎人数之儀ハ御目付へ懸合遣候事、

二月十日

一、朝五ツ時過、品川駅村田屋伝左衛門旅宿出立、四ツ時前口宣御入座二付大御門開之、下斗米右太夫口宣御長持脇へ付添、永田右膳御長持へ引続入候、此節御玄関御縁取迄御納戸船越嘉治馬・中里行藏、御次坊主兩人連出迎居候二付、右へ相渡候事、

一、永田右膳御勝手口より罷上、刀ハ參上之間へ差置、直様御書院御二ノ間へ罷通り、懷中より鍵差出し、封印切、錠明ケ、御納戸手伝二而梓より御箱取出し、錠を明ケ、内箱二重服紗包封印取押、口宣差出候節、御床へ飾置候御三方御納戸持參二付、右へ載、御二ノ間へ一列相詰居候御用人宮寺直記、御書院御一ノ間へ進着座候處へ、永田右膳御三方俣持參相渡、御連状并御返札、且御官物請取書・口宣写等同断差出候事、

一、右畢而、於御居間書院御家老中侍座、殿様被遊御逢、口宣御用無滞相勤帰府太義之旨御意被仰出候事、

一、御家老中於御席御出逢被成候事、
一、下斗米吉太夫へ者御目付先立、於御席被成御出逢、太義候旨被仰渡候事、
品川駅より御屋鋪迄行列左之通、

絹看板着 絹看板着
宰領足輕 足輕小頭沼館与伝治 法被着 手代共
口宣梓御長持 昇夫 三人
絹看板着
宰領足輕

若党 鐘持
具足櫃 永田右膳 草履取 竹馬 下斗米吉太夫
若党 箱持 草り取

右之通、尤永田右膳切棒駕籠・下斗米吉太夫乗駕籠、昇夫并外共御屋敷より参り候二付品川駅二而夫繼立不申、馬荷計繼立候事、
一、御老中様へ御所司代より之御返書、早速御月番様へ御留守居御使者を以被指出候趣之事、
一、殿様四ツ時御供揃二而、右為御礼御老中様方へ被遊御直勤御口上左之通、

私儀、旧蠟四品被仰付候二付京都へ遣候使者罷帰、口宣頂戴仕難有仕合奉存候、右為御礼致參上候、

南部遠江守

右中奉書半切二認、服紗包等無之、
一、若御年寄様へ御留守居御使者被差出御口上左之通、

拙者儀、旧蠟四品被仰付候二付京都へ遣候使者罷帰、口宣頂戴仕難有仕合奉存候、

依之以使者申遣候、

南部遠江守使者

宮寺直記

一、京都御所司代脇坂淡路守様より殿様へ之御返書左之通、

貴札令拝見候、公方様益御機嫌能被成御座恐悦旨、尤之御事候、将又貴様今般四品被仰付難有由、就夫口宜之奉書御用番より相渡候間、御使者を以被遣候、委細御紙面之趣致承知候、即伝奏へ申述、位記等相調、今日御使者請取候二付奉書御請相渡申候、恐惶謹言、

正月廿七日

脇坂淡路守

南部遠江守様

御報

一、右同断御奉書之御請書、御用番牧野備前守様へ被成御差出候旨、御所司代様へ又々御文通左之通、

一筆致啓上候、拙者儀、四品被仰付候二付先頃御奉書使者を以為持進候處、御差図被下、口宣首尾能頂戴難有仕合奉存候、其上御請之壺封牧野備前守殿へ相達候、右御礼為可申述如此御座候、恐惶謹言、

南部遠江守

二月十日

信順御据判

脇坂淡路守様

人々御中

一、右之廉、毛利様御元帳二ハ大坂御屋敷詰留守居上京相勤候様相見候得候へ共、此方様二者京・大坂共二御屋敷不被為有、詰合之御家中無之事故、爰許脇坂様御屋敷へ御使者を以被差出相濟候趣之事、

御執次

三上修理

一、雜掌物御目錄被成下候二付、手目錄相添御執次へ頼置候事、

覚

御雜掌衆

御兩人

御執次衆

御兩人

御書記役衆

御兩人

御帳前衆

御兩人

一、同式百疋宛

以上、

右之通小奉書切紙へ認、雜掌へ八足付白片木、

余者平片木、何れも包熨斗添、

一、三条様へ罷出御札御使者相勤候御口上・御

進物東坊城様之通、隨而雜掌物・被下物都而

同断故略之、

御執次

藤木要人

一、右相濟、御所司代脇坂様へ罷出、今日口宣

無御滯御渡相濟候二付、為御届参上仕候段申

入候処、公用人出溯勝右衛門罷出、淡路守様

被成御承知候旨、且御奉書之御返書・御連状

老通并殿様へ之御返札老通被相渡候二付、慎

受取候旨及返答、隨而出立之儀相伺候処、勝

手次第出立可致旨二付、明廿八日致出立候段

申断致退出候事、

一、水口近江介へ諸事御頼、殊二認もの等相頼

二付左之通被成下、手目錄相濟、横田鹿一郎

手を以相廻候事、

覚

御進献目錄并

納目錄認方御頼二付、

口宣写御頼二付、

口宣内見二付、

万端御頼二付、

御官物内見分

罷越候二付、

右同断之節支度料、

以上、

右之通相送候事、

但右之内口宣内見者雜掌取扱候二付、同

所へ相送可申候得共、水口近江介を以申

入候二付、一処二差遣、同人より雜掌中

へ相廻候事、

一、口宣無御滯御渡相濟候為御注進、六日限別

仕立町便を以江戸御屋鋪御留守居方并御目付

へ申遣候事、

但此伝便二月二日七ツ時過着致候趣之事、

一、平野屋治兵衛并巴屋源兵衛為御歛罷出候二

付、御官物納方世話仕候旁御並合も有之、金

百疋宛為御挨拶被成下候事、

一、今日口宣御渡二付禁裏御所九門定番并日御

門・唐御門御番人、為警固東坊城様御門前へ

相詰居、名札差出、退出後為恐悦扇箱致持参

候二付、為御挨拶左之通銀老兩ツ、相送候事、

但此廉毛利甲斐守様御先帳二相見得不申

候二付、薩州様衆へ談合候処、前例罷出

候二付、老入へ銀四匁ツ、相送候御並合

之趣申事二付、銀老兩ツ、相送候事、白

片木熨斗添、

一、禁裏三口御門定番

下立売御門

木村新藏

佐々木庄三郎

蛤御門

黒川孫太郎

田中市左衛門

寺町御門

林 当助

岡崎忠藏

一、禁裏外御構六方六口御門定番

今出川口北御門

武者小路口乾御門

村上利左衛門

境町口南御門

中野十兵衛

清和院口巽御門

木村長左衛門

石薬師口東御門

立入亦左衛門

中立売口西御門

安田喜間太

一、禁裏日御門定番

太田五兵衛

植実九兵衛

下村与左衛門

一、禁裏唐御門定番

右之通銀老兩ツ、相送候事、

一、弥明日出立二付、伊集院太郎右衛門并横田

廉一郎・土師庄十郎へ罷越、逗留中世話相成、

且借物等致候厚札申述、隨而御目錄被下等取

計候事、

上下着 沼館与伝治 上下着 菅井勇藏
下座見 口宣御長持 御官物入御長持
上下着 菅井勇之進

絹看板着足輕 長持駕 若党 鍔
御進物釣台 永田右膳 草履取 箱
若党

切棒駕籠 若党
下斗米吉太夫 合羽籠
草り取

一、口宣御渡之御座敷向即礼可致旨雜掌申聞候
二付、御取次先立罷通候処、御両家雜掌御二
ノ間左右へ相詰居、差図方致、即礼致候事、
一、東坊城様口宣御渡被成候間、罷出候様申聞、
御三ノ間迄御取次先立、夫より直様右膳御二
ノ間正面へ罷出、平伏致候処ニ而、南部遠江
守殿使者永田右膳と雜掌致披露候処ニ而、右
之手を突居、左之手ニ而小サ刀相外ス、直様
相進、御一ノ間御敷居際へ平伏、夫より摺寄
り、東坊城様口宣御直ニ御渡ニ付、謹而頂戴
致、箆俣捧、御一ノ間御敷居際迄引退、平伏
致し、夫より本座へ着、帯刀致伏座、引取、
此節吉太夫御三ノ間御敷居際ニ平伏致居候事、
但別間ニ而近江介取合、口宣案致内見、
箆ハ相戻し、口宣案・位記等元之通詰方
致相渡候ニ付受取、御使者之間へ引取候
事、

納目錄左之通、
從四品下成 南部遠江守

禁裏

上藤御局 黄金壹枚
長橋御局 銀子壹枚
大御乳人 右同断
執次 右同断
銀子貳拾目

准后

於八百御方 白銀參枚
於五百御方 銀子壹枚
執次 右同断
銀子拾文目

新侍賢門院

於与利御方 白銀參枚
御家内 銀子壹枚
銀子拾文目

内侍所

白銀四拾目
御太刀代銀五文目

上卿

銀子六拾目

職事

右同断

位記

銀子三枚

御請印

銀子六拾目

中務大輔

右同断

中務少輔

右同断

兩伝奏

銀子六拾目

中務省

銀子壹枚

主鈴兩人

銀子壹枚宛

位記副使

銀子貳拾目

雜掌四人

銀子貳拾目宛

右之通請取差上銘々へ相渡申候、以上、

安政三辰年正月 東坊城前大納言殿家

宮崎造酒 印

三上信濃介 印

三条大納言家

丹羽豊前守 印

森寺周防守 印

永田右膳殿

右之通遣違始未取替候事、

一、口宣入梓長持 一、口宣入梓長持

右致持參居、口宣頂戴内見後二重箱へ入、

内外服紗包ニ致、右膳封印付、外家箱入、

錠卸し、花色絹御紋付油单掛、梓長持へ入、

錠卸し、封印付、下斗米吉太夫守護足輕小

頭上下着用、畢足輕絹看板着致、宰領薩州

様御屋敷迄持帰り候事、

但絵符致用意罷越、帰之節建せ候事、

帰府之砌道中勿論建せ候事、

口宣 南部遠江守

一、右相濟、永田右膳居殘雜掌物、水口近江介

へ一礼申退、御玄閑御縁取より立戻り、

後之御礼・御進物御使者相勤候御口上左之通、

今日口宣無御滞御渡被下難有仕合奉存候、

依之目錄之通進上仕候、

大鷹檀紙堅目錄 干鯛 一箱

御樽代 三百疋

以上、 御名

右之通遠江守兼而申付越候段御執次へ申置候

事、

右三枚何れも上包大奉書也、雲足之台へのせる也、

一、此目錄毛利様御先帳ニ相見得不申、近例相始り候趣之事、

一、納目錄認方、跡へ頭し候故爰ニ略、

正月廿五日

一、御所司代様公用人より左之通申參候事、被相達候儀有之候間、今日中御出候様淡路守様申候、以上、

正月廿五日

永田右膳様	出淵勝右衛門
横田鋼八	村田平治
横田小平治	横田小平治
塩山丹宮	

右返答

御手紙致拜見候、然者被仰渡之儀御座候間、今日中可罷出旨奉畏候、以上、

正月廿五日

南部遠江守内

右四人様

永田右膳

右夜五ツ時頃到来、尤使太田万治口上ニ而申出候者、手紙ニハ今日中迄と相認候得共、最早夜ニ入、彼是深更ニも可相成候間、御返事ハ御前例之通被遣候半、明朝御越被成候而宜旨可申上様公用人申付越候段、取次を以申出ニ付、為念下斗米吉太夫玄関迄罷越、公用人誰殿より口上被申越候哉、為相尋候処、一統より之口上ニ御座候、御当所者江戸表と違ひ、四ツ時過相成候而者所々木戸相_{手懸}り通行間取

候間、明朝御越被成候而宜御座候間、此段口上ニ而宜申上候様申付越候段申出ニ付、返札者前条之通差出候得共、任仰明朝參上可仕候段々忝存候旨口上ニ而挨拶申遣候事、

正月廿六日

一、朝五ツ時出宅、永田右膳服紗小袖半袴着用、御所司代様へ罷越、昨夜御呼出御座候処、御口上も御座候ニ付、唯今參上仕候段御取次を以申入候処、公用人横田小平治を以左之通被仰渡、

明廿七日、於東坊城前大納言亭位記・口宣案等可被相渡候間、辰ノ半刻可罷出候事、

正月廿六日

右之通御書取を以被仰渡候間、御請申上、隨而昨夜御呼出候処、御口上被仰下候ニ付、任仰唯今參上仕候、御厚恵之段忝存候、御同役中へも可然御心得被下候様一礼申述、退出候事、

但昨夜御呼出ニ而罷出候事故明日之座へ取調置可申哉、又今日御達相成候事故今日御達ニ取調可申哉之旨、内々及問合候処、何れニ而も不苦旨横田小平治挨拶ニ付、其俣取調候事、

一、夫より両伝奏へ為御請、罷出、御取次へ申置候事、

一、御官物白銀并銀子、平野屋治兵衛より相納候事、

一、右台類、巴屋源兵衛より相納候事、
右何れも当御殿拜借差置候事、

一、今朝、永田右膳出宅後、御官物為内見分水口近江介入来、当御殿御二ノ間へ御進献之品々飾付、下斗米吉太夫麻上下着用相詰、近江介可被致見分、至極宜旨、無滞相濟、此節伊集院太郎右衛門・横田鹿一郎・土師庄十郎も立合候、右相濟候処へ永田右膳罷帰、水口近江介へ一礼及挨拶、御官物類相改、治兵衛・源兵衛手伝白木長持へ相納、封印付、御長屋へ相廻置候事、

但水口近江介へ茶漬ニ而も差出可申筈之処、当節茶用中、支度等差出候而ハ却而迷惑之旨、兼而鹿一郎迄案内有之ニ付、追而支度料ニ而相送候方可然、茶壺通ニ而相濟、尤下部鳥目二十疋差遣候事、

正月廿七日

一、辰刻、伝奏御月番東坊城様へ永田右膳熨斗目長上下着用、下斗米吉太夫熨斗目半袴着用、罷出、御取次を以申入候処、水口近江介罷出、取合致世話與、無程御両家雜掌相揃応対有之、畢而御官物可請取旨申候間、納目錄右太夫ニ為持、御取次先立ニ而別間へ罷通候処、毛氈敷御官物飾付、兩伝奏雜掌一列ニ相詰居候ニ付対座へ座付、御取次兩人飾付之御官物へ向座付、此節納目錄吉太夫箱より差出、右膳受取、扣居候処ニ而請取目錄御取次高声ニ説合、相違無之ニ付納目錄相渡、請取目錄請取、本座へ引取居候事、

但御官物飾付等ハ平野屋治兵衛取計候ニ付、此方世話無之事、
行列左之通、

内侍所

御家内 銀子拾文目

白銀四拾目

御太刀代銀五文目

銀子六拾目

右同斷

職事 銀子三枚

位記 銀子六拾目

御請印 銀子六拾目

中務大輔 右同斷

中務少輔 右同斷

兩伝奏 銀子六拾目宛

中務省 銀子壹枚

主鈴兩人 銀子壹枚宛

位記副使 銀子貳拾目

雜掌四人 銀子貳拾目宛

右之通相納申候、以上、南部遠江守使者

安政三辰年正月

永田右膳

右之通相認、昨日差出置候伺書末々継足し相渡候二付一札申述、引取候事、

但水口近江介、兼而万端相頼置候二付罷出、取合候事、

一、三条大納言様へ御使者相勤、御進物并諸被下物、共二都而東坊城様之通故相略、尤御取

次へ申置候事、

但御官物伺書御付札二而御差込相成候間、

雜掌中へ此段共宜御心得被下候様相頼置候事、

御取次 村上隼人

一、右畢而禁裏付并兩御町奉行様へ御使者相勤御口上左之通、

益御堅固珍重存候、拙者儀、旧蠟十六日

四品被仰付難有仕合奉存候、拙者口宣頂戴之使者為指登候二付、使者を以目錄之通令進入候、

御太刀并

御馬 代銀壹枚 一腰

一、禁裏付 大久保大隅守様御取次 安達專藏

都筑駿河守様御取次 関口伴五郎

一、御町奉行 岡部備後守様御取次 寛 庄藏

浅野中務少輔様御取次 安達幸太郎

右之通御使者相勤、何れも御執次へ申置候事、

一、御官物類のせ台前条書面二向取調、桧物師

巴屋源兵衛へ申付候事、

一、御進献之黄金江戸表より致持参候二付、外

御官物・白銀并銀子包等、右同斷書面二向平

野屋銀兵衛へ申付候事、

一、今日東坊城様より御渡相成御官物納目錄認

方之儀、横田鹿一郎手相頼、水口近江介へ相

廻候事、

但御進献目錄共認呉候様頼越候事、

正月廿三日

一、兼而相頼置候御進献目錄并納目錄出来候趣

二而、水口近江介・横田鹿一郎まで到来二付

目錄箱計桧物師源兵衛より為取寄、右へ納置

候事、

御進献目錄右之通、納目錄ハ次へ差出候

二付爰二略、禁裏御所

南部遠江守	源信順	黄金	壹枚
-------	-----	----	----

大高檀紙七折ニシテ
三ツ折目へ如此、七ツ折
目之処へ
御品御実名認、

一、准后御方

白かね	三まい	南ふ遠江守	源信ゆき
-----	-----	-------	------

大高檀紙七ツ折、
認方右同斷、尤かな
交り、如此二認、

一、新侍賢門院御方

白かね	三まい	南ふ遠江守	源信ゆき
-----	-----	-------	------

右同斷、

可然御差図被下候様相頼、引取候事、

御使者勤之節供人数

若党 兩人

下座見 一人

鍵持 一人

挟箱持 一人

草履取 一人

長持駕籠

陸尺四人

合羽籠 一人

右之通候得共、同断召連候二付余者略之、

一、諸家様御使者、長柄傘為持候御並合も有之

哉二候得共、当節柄、長柄ハ相略候事、

一、下座見初日雇之もの、当御屋鋪御出入大津

屋忠兵衛へ申付候事、

正月廿日

一、朝五ツ時過出宅、永田右膳熨斗目半袴着用、

御所司代へ罷出、御取次を以御奉書致持参候

旨申入候処、公用人塩山丹宮罷出候二付、左

之通御口上申入候事、

拙者儀、旧蠟十六日四品被仰付候二付口

宣之御奉書御用番より御渡被成候、依之

頂戴之使者為指登候二付、御奉書并姓名

書差出申候、可然御取計奉頼候、此段以

使者申述候、

御奉書 御姓名書 御状

右之通差出候処、淡路守様被成御落手候旨返

答二付退出、御玄関御縁取より立戻り、御進

物之御使者相勤御口上左之通、

弥御堅固被成御勤珍重之御事御座候、将

又拙者儀、旧蠟十六日四品被仰付難有仕

合奉存候、依之口宣頂戴之使者為差登候

二付、可然様御差図可被下候、右二付目

録之通致進覽之候、

御太刀 中上り

御馬 代白銀五拾兩

以上、

南部遠江守

右之通御使者相勤候事、

御取次

内山清吾

一、東坊城様へ御使者相勤候口上左之通、

弥御安泰可被成御座珍重御儀奉存候、然

者私義、旧蠟十六日四品被仰付難有仕合

奉存候、依而口宣頂戴之使者為指登申候

二付、万端宜御指図奉頼候、随而目録之

通進上之仕候、

御太刀 中上り

御馬 代白銀二十兩

以上、

南部遠江守

右之通御使者相勤候事、

御取次

三上修理

右之通雜掌初御目録被成下候二付、御使者序

二御取次三上修理へ相頼、手目録相添差出候

事、手目録奉書切紙左之通、

覚

御雜掌衆

御兩人へ

一、金三百疋宛

御取次衆

御兩人へ

御書記役衆

一、同二百疋宛 御帳前衆 御兩人へ

一、同百疋宛 御兩人へ

一、同式百疋 小頭衆 御兩人へ

以上、 四人へ

但付目録、雜掌へハ足付白片木、余ハ平白

片木、何れも包熨斗添、

右之通被成下、尤此廉毛利甲斐守様御先帳ニ

ハ雜掌へ計三百疋宛被成下候二付、右之通取

調候処、近例嘉永六年之夏より大小名様共ニ

何れも前後共一統へ被成下候二付、近例之御

振合ニ御仕向被成下候様、水口近江介より横

田鹿一郎迄申来、薩州様衆へ及相談候処、御

諸家様共被下ニ相成居候御近例之趣故、右之

通被成下候事、

一、三上信濃介并水口近江介罷出御目録頂戴之

御請申出、随而昨日伺置候御官物例書左之通、

南部遠江守

從四品下成

禁裏 黄金壹枚

上藤御局 銀子壹枚

長橋御局 右同断

大御乳人 右同断

准后 銀子貳拾目

白銀參枚

於八百御方 銀子壹枚

於五百御方 右同断

執次 銀子拾文目

新侍賢門院 白銀參枚

於与利御方 銀子壹枚

於与利御方 銀子壹枚

於与利御方 銀子壹枚

但御留守居伊集院氏より被申付候趣申出候事、勇之進之養父也、

一、椀物付膳部并吸物沍ツ・肴三種・酒三升、手目録相添、太郎右衛門殿より被相送候事、

一、添役兩人より酒五升、頓而手目録添、被相送候事、
一、暮時前伊集院太郎右衛門殿・横田鹿一郎殿・土師庄十郎殿挨拶旁着、為欽参^{飲カ}呉候二付、到来之酒壺相開、此方よりも別段吸物・肴申付、乍致饗応勤向及談合、夜二入罷帰候事、右畢而菅井父子へ残物二而酒為給候事、

正月十八日

一、四ツ時前、横田鹿一郎殿・土師庄十郎殿入来、御使者向勤方御先例御並合及尋向、且江戸表より致持参候毛利様御覚帳差出、彼方より薩摩守様從四位上成之取調帳并旧蠟禁裏御所御移住之節御始御使者被相勤候節之御帳面等持参、夫々突合見繕、御官物伺之儀者毛利様四品成之御官物取調、東坊城様書記役水口近江介へ横田鹿一郎持参、諸事相頼呉様申談候事、

但此節茶菓子差出時過相成候二付、茶漬も差出候事、
一、右水口近江介、当御屋敷へ兼而御立入仕居候者之由、都而御頼相成居候得者万端都合能参候旨二付、横田鹿一郎を以諸事相頼、右二付御目録金貳百疋同人へ持参為致候事、

正月十九日

一、五ツ時服紗小袖麻上下着用、御所司代脇坂淡路守様へ罷出、公用人中へ出合申度旨御取

次を以申入候処、無程出洩勝右衛門罷出候二付、御兩敬御間柄之御趣意も有之二付、時候御口上取繕、御相忠申述、随而口宣頂戴之御奉書御老中様被成御渡候二付、江戸表より致持参候間、明日致持参候而宜敷可有御座候哉之段申入候処、勝手次第致持参候而宜旨、且別人致持参候哉と被相尋候間、諸事拙者相勤候二付明日も拙者持参差出候旨申答、引取候事、

一、夫より伝奏御用番東坊城前大納言様へ罷出、雜掌へ出合申度旨御取次へ申入候処、無程三上信濃介罷出候二付、時候相忠、且此度口宣頂戴之使者として上京仕候間、万端宜御頼申候段申述、随而毛利甲斐守様四品成之御官物取調参候間、宜御差図被下候様申入、例書差出、何れ明日表向之使者相勤候、其節可然御差図之儀相頼候旨申入、引取候事、

毛利様例書左之通、
天保六年未正月毛利甲斐守様從四位下城之節之例書

禁裏

黄金壹枚

上藤御局

銀子壹枚

長橋御局

右同断

大御乳人

右同断

仙洞 執次

銀子貳拾目

新大納言御局

白銀參枚

權中納言御局

銀子壹枚

別当御局

右同断

大宮 執次

銀子拾文目

万里小路御局

白銀參枚

銀子壹枚

梅小路御局 右同断
御乳人 右同断

准后 執次 銀子拾文目
白銀參枚

於千万御方 銀子壹枚
於登志御方 右同断

内侍所 執次 銀子拾文目
白銀四拾目

御太刀代 銀子五文目
上卿 銀子六拾目

職事 右同断
位記 銀子參枚

御請印 銀子六拾目
中務大輔 右同断

中務少輔 右同断
兩伝奏 右同断

中務省 銀子壹枚
主鈴兩人 銀子壹枚宛

位記副使 銀子貳拾目
雜掌四人 銀子貳拾目宛

右之通相納申候、以上、南部遠江守使者

安政三辰年正月 永田右膳
右中奉書半切二認、美濃紙服紗包二致差出候事、

例書

一、三条大納言様へ罷出、雜掌丹羽豊前守へ面会、東坊城様雜掌へ申聞候通万端相頼、随而御官物取調伺書へ御月番東坊城様へ差出候間、

奉存候、就夫口宣之御奉書御用番より御渡候間進之候、可然様御差図可被下候、委細使者申含口上候、恐惶謹言、

十二月廿六日 南部遠江守 信順御据判
脇坂淡路守様

右中奉書裏白ニ認之上、封表書也、脇坂淡路守様へ御口上、

拙者儀、旧臘十六日四品被仰付候二付、

口宣之御奉書御用番より被成御渡候、依之頂戴之使者為指登候二付、御奉書并

姓名書差出申候、可然様御取分奉頼候、此段使者を以申述候、

右畢而御玄闕下座敷迄罷出、立帰、御進物之御使者相勤候節之御口上、

弥御堅固被成御勤珍重候事御座候、将又拙者儀、旧臘十六日四品被仰付難有仕合

奉存、依之口宣頂戴之使者為差登候間、可然様御差図可被下候、右二付目錄之通

致進覽候、

御太刀 一腰 中上り

御馬 代白銀五拾兩 一疋

以上、

南部遠江守

兩伝奏へ之口上、

弥御安康可被成御座珍重御儀奉存候、然者私儀、旧臘十六日四品被仰付難有仕合奉存候、依之口宣頂戴之使者為指登申候二付、万端宜御指図奉頼候、依而目錄之通進上之仕候、

御太刀 一腰 中上り

御馬 代白銀貳拾兩 一疋
以上、

南部遠江守

禁裏付并兩御町奉行様へ御進物御使者相勤候節之御口上、

益御堅固珍重存候、拙者儀、旧臘十六日

四品被仰付難有仕合奉存候、依之口宣頂戴之使者為指登候二付、以使者目錄之通

令進入候、

御太刀 一腰 並上り

御馬 代銀壹枚 一疋

右之通取調致持參候旨御席へ懸御目、御用人・御留守居へも申聞候事、

外二絹法被并御紋付弓張挑灯用意持參之事、

一、明日出立二付御家老中被成御出逢候事、

一、右同断二付御目付先立下斗米吉太夫出、御

席御家老中御出逢被成候事、

一、前段之品々小長持或ハ兩懸等二而持參之、

御並合も有之哉二候得共、御時節柄旁手輕二

相成候様、此度ハ具足櫃へ入組、足付通し人

足二而致持參候事、

永田右膳道中召連人数左之通、

若党 貳人

鍮持 壹人

草履取 壹人

具足櫃 足付 壹人

竹馬 繼夫 壹人

足輕小頭 壹人

平足輕 壹人

右兩人之内壹人宛目立不申様具足櫃

守護心得之事、

下斗米吉太夫 上下 貳人

上下 拾人

正月六日

一、京都へ口宣頂戴之御使者永田右膳并介添下斗米吉太夫、今朝六ツ時過出立候事、

正月十七日

一、道中佐屋廻り二而、無滞十一泊十二日振二而、京都錦小路通東洞院薩州様御屋敷へ致着候事、

但江戸表出立前、芝様へ兼而御頼御筆前相成居候二付、前晚大津駅泊より京都御

屋敷詰御留守居伊集院太郎右衛門殿迄、

弥明十七日其御屋敷へ參着致候旨案内、手紙飛脚相履差越候事、

付、京都入口蹴上ケ小休所迄、為案内御足輕菅井勇之進罷越居、同人案内二而御屋敷

へ昼時參着候事、

一、着懸御留守居伊集院太郎衛門殿へ吉太夫同道、勇之進先立二而罷越面会、万端及頼談候

事、

一、同人下役横田鹿一郎殿・土師庄十郎へも罷

越、万端相頼候事、

一、表御長屋へ着、逗留中住居候事、

但着前玄闕之柱へ表札左之通、

南部遠江守様御家来
永田右膳殿
下斗米吉太夫殿

右之通紙札なり、

一、御足輕菅井勇藏御長屋へ詰切居、万事致世話呉候事、

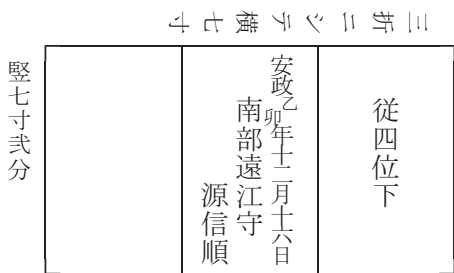
一、右之通御奉書請取帰り、殿様へ入御覽、御家老中へ申上候上、御納戸へ致守護居候様預り被仰付候事、

正月五日

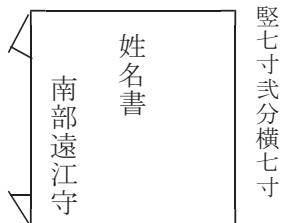
一、口宣御頂戴之御使者永田右膳明日出立ニ付、於御居間書院御家老中侍座、殿様被遊御逢、御用向無弓断相勤候様御意仰出候事、

一、御老中様御連名之御奉書并脇坂淡路守様へ之御状、御家老中御渡、無弓断守護罷登候様御達候事、

一、明日出立ニ付左之品々致持参候旨御家老中へ申上、御用人・御留守居へも申聞候事、
一、御姓名書左之通、料紙大高延檀紙壹枚、太刀折紙のこたく横三ツ折ニシテ相認、上包同紙ニ而、上書如図、



豎七寸式分

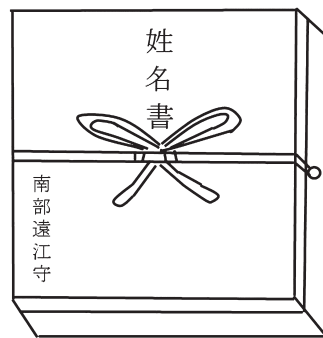


豎七寸式分横七寸

御姓名書定めたる寸法無之候間、帳合見合、御姓名中スミ認宜候事、

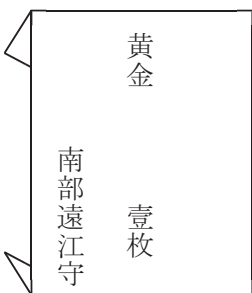
一、御姓名書上箱、如左之図、

豎内法七寸五分、身深サ内法七分、



環赤銅菊、座裏ニ金物有、嶋桐野郎蓋、絹萌黄真田平打紐長サ壹尺五寸、浅黄羽二重裕服紗二包之、御姓名書据ル白木台長サ九寸横八寸七分足高サ六寸、疊わく入、鉄鉾打、

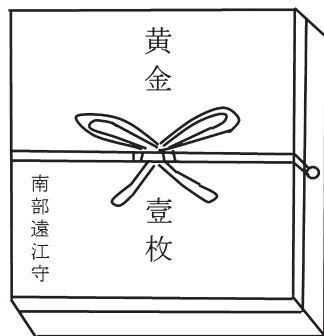
一、御進献之黄金吉野紙ニ而包、其上を如此極上美濃紙ニ而包、太サ黄金二応、後藤据判不摺様上を綿ニ而卷、左之如図之箱ニ入、黄金之表下角ニ如此之小札張付ル、



南部遠江守

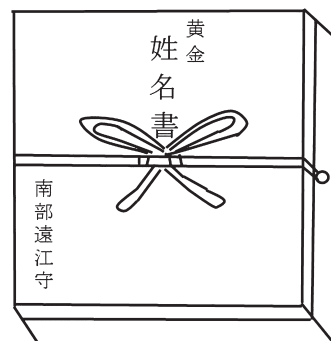
箱長サ内法五寸五分、深サ内法七分、

箱嶋桐野郎蓋、箱の内落し板、黄金包之俣くり入、上ニ押板を置、環赤銅菊、座裏金物あり、萌黄真田平打紐付、浅黄裕服紗ニ而包也、



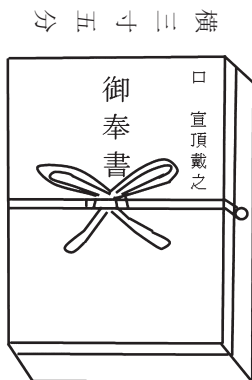
右据ル白木台之長サ七寸、横五寸壹分、足の高サ六寸、疊足わく入、一重くり、鉄鉾打、

内法九寸八分四方、身深サ内法五寸五分、

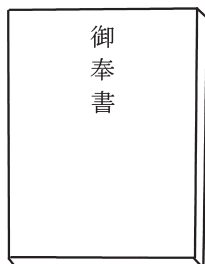


右黄金箱・御姓名書箱、一所ニ入組候外家箱也、桐ニ而かふせ蓋、紐ハ木綿真田、環赤銅菊、座裏金物あり、

嶋桐野郎蓋、環赤銅、裏金物有、萌黄真田付、御奉書之上を浅萌黄羽二重裕服紗ニ而包也、此箱ニ入、左之上箱へ入也、



長サ七寸五分、内の深サ一寸、



上箱縦さん蓋、寸方内箱ニ准ス、木綿真田紐、つゝら懸之事、

但御奉書白木台へ据ル、台之寸法内箱ニ応ス、台俣御所司代へ持参、差出候事、御所司代へ之御状左之通、

一筆致啓上候、公方様益御機嫌能被成御座奉恐悦候、将又拙者儀今般四品被仰付難有仕合



(表紙題箋)
「四品御昇進一付下」

安政二乙卯年十一月十六日

一、殿様今日御用召二付御登城被遊候処、格別之思召を以四品御昇進被蒙仰候事、

十二月廿三日

一、殿様今日御登城、御叙位之御礼無御滞被仰上候事、

十二月廿四日

一、今般御昇進二付口宣御用京都へ御使者、来正月六日出立被仰付、

永田右膳

右於御席被仰渡之、

一、右二付左之通伺書差上候処、御付札二而御沙汰相成候事、

伺之覚

一、此度口宣御用上京被仰付候二付、御使者相勤候廉之着服、如何相心得可有候哉、

一、京都逗留中、町宿可被仰付候哉、

一、遠所混離候御用先、老人二而安心無御座、殊更於京都御進献物并御賦り御品買調候向も可有御座候哉、其上病氣御座候而ハ御用支相成可申奉存候得者、兎角老人二而安心無御座候間、介添二而も可被仰付候哉、

一、口宣入御小長持往来共、足付雇可被仰付候哉、

但登之節ハ御奉書并黄金入参候、尤足付雇之儀御並合も御座候二付奉伺候事、

一、右同断警衛之ため宰領御足輕、何人御預可被仰付候哉、

一、道中召連人数、如何可被仰付候哉、

一、勤方廉々、爰許二而伺究上京相勤申度奉存候得共、諸家御並合も可有御座候義二奉存候間、都而御並通り聞繕相勤可申哉、

一、御金何程御預可相成候哉、

但御預金員数二寄、道中安心之ため為替被仰付被成下度候事、

一、往来路用并京都逗留中旅籠代等之儀、勘定二可被仰付候哉、

右之通奉伺候、以上、

十二月廿四日

永田右膳

御付札

何れも御留守居へ談合、諸家御並合も可有之候間、諸事御都合能相勤可申候事、

十二月廿五日

一、此度口宣御用永田右膳御使者被仰付候二付、介添上京被仰付、

下斗米吉太夫

右御目付先立、於御席被仰渡之、

十二月廿六日

一、御用番牧野備前守様より位記御奉書御渡可被成候間、今日中老人罷出候様公用人衆より御留守居へ手紙を以申来候二付、例之通御請書差出、引続野中鉄与罷越、御呼出二付罷出候段御取次へ申断、例席へ扣居候処、御用人罷出、京都御所司代脇坂淡路守様へ御老中様御連名之御奉書老通被相渡、口宣頂戴之使者御勝手次第被差登候様相達候二付、早速為指登可申段申述、引取候事、

御奉書左之通、

南部遠江守事、為從五位下之処、今般從四位下被仰付候、位記等之儀相調候様伝奏衆迄可被申入候、恐惶謹言、

安政二年

十二月十六日

内藤紀伊守
信親 判
久世大和守

広周 判

牧野備前守

忠雅 判

阿部伊勢守

正弘 判

堀田備中守

正篤 判

脇坂淡路守殿

脇坂淡路守殿

堀田備中守
阿部伊勢守
牧野備前守
久世大和守
内藤紀伊守

四月廿四日の貴書、愈御清榮奉賀寿候、然は被仰下候条々逐一奉拝承候、早速実子届之儀所置可致処、南部娘は同人ヨリ申上候通、当三月中婚禮相済候段、下着之上承申候、右ニ付ては周防娘モ御座候間、早速被仰下通実子届計可申処、小事ニてモ万端同苗へ差図ヲ請不申候ては、不相成都合故、押付て取計モ致兼候上、此度下着ニて皆々対面仕候処、周防娘ヨリは溪山末子安藝娘十六歳ニて、相応之様子之モノニ御座候、戸澤同様之頃合ニて至極ヨロシク御座候間、直ニモ御届之儀取計度存候へトモ、周防娘ヲ差置安藝娘実子届之処、同苗所存難計、其上万端差図ノ事故、同苗方不申参候ては所置仕兼候、南部娘ニ候得は、最初ヨリ被仰候上、貴所被仰下候間、夫ニテ取計、跡ニテ同苗へ貴書為持候て申遣ヨロシク候得共、周防・安藝之内ニ候ては、此方ニて取極儀難致候間、戸澤之処トテモ不相成候ハ、南部へ此度委細申遣候通、同苗へ御沙汰被成下、同苗ヨリ安藝娘之義申参候へハ、早速所置可仕、其節貴書モ被下候様仕度、色々内味申上恐入候得共、無抛奉申上候、尤安藝娘御存之訳無之候間、先便貴公ヨリ御尋ニて書付差上候て、御承知之処ニ仕度、今度同苗へハ、貴所様ヨリ御尋ニ付、周防・安藝娘兩人ツ、年付ニテ申上候旨、何トナク申遣置候条、南部へ細事申遣候間、御尋被下候て宜敷御勘考可被下、南部娘婚義之事着早々可申上候、大力タ戸澤ニて御用済ト考候上、初て下国故色々取込延引ニ相成恐奉存候、右ニ付てモ少々入組之訳

モ有之ト存候間、旁安藝娘治定難仕候間、宜シク御談合之上同苗へ被仰聞、其上貴公ヨリ同苗へも被仰聞候間、早々取計候様ニト被仰下候様、又同苗ヨリモ京地・国元へ申遣候様御断可被下候、色々自由申上候得共、何モ成就相成候様仕度草々奉申上候、姉小路殿へモ程能御伝可被下候、

一、先便書物被下忝、三部被下候内ハ一部少子頂戴仕候、二部之品今一部ツ、拜戴奉希候、当秋便ヨリ差遣、来春迄ニハ北京へ差登候様可申遣候、

一、中山之様子兎角根深相成候て、中々可引取様子ニ無之候、其上近年中ニハ、当国へモ追々可参光景色色々符合モ仕候条、別て混雜の義ト奉存候、水戸ノ老公等之如キ御方ニ御座候ハ、諸人一和可致ヤニ奉存候、実ニ不入義ト思召恐入候得共、心配之余リ御咄ニ奉申上候、近年中ニは当国・中山共ニ是非商館取立可申趣、色々符合之訳有之極密閣老此度内奏仕候、乍然呉々御内々ニ奉希候、先は先日之貴答迄可申上如斯御座候、余は後便可申上候、恐惶謹言、

六月五日

尚以時氣御自愛專一二奉存候、宗益老へモ申上候得共、細事ハ不申上候条、此書面御見セ可被下、此上ハ南部等御談合ニて御取極メニて御所置可被下、遠路へモ中々御示談難調候間、ヨロシク成就之程御工夫奉希候、甚ダ乱筆宜敷御推覧可被下候、以上、

楽真院様

貴答

薩摩守

(順聖公年譜所収)

南部娘ニ於朝。南部信順娘八百姫。島津貴敦室。周防娘ニ於哲。島津久光娘。

安藝娘ニ一子。島津忠剛娘。篤姫のこと。

溪山ニ島津齊宣。鹿兒島藩九代藩主。

戸澤ニ戸澤正実。羽前新庄藩主。

同苗ニ島津齊興。鹿兒島藩十代藩主。

薩摩守ニ島津齊彬。

楽真院ニ多紀元堅。のち楽春院。医学館を總裁した多紀家の出で、この時期は幕府の医官を務めていた。

a 『鹿兒島県史料』はこの書簡を嘉永六年六月五日付のものとしているが、八百姫と島津貴敦の婚礼が嘉永四年三月であることや、「安藝娘」一子が嘉永四年に数えて十六歳となる(天保六/一八三六年十二月十九日生まれ)ことなどから、少なくとも「当三月中」は嘉永四年三月を指すと考えられる。この年の二月に藩主となった齊彬は、三月に江戸を發し、五月九日に鹿兒島に入った。この時、八百姫の婚礼が終わったことを聞かされたのである。

b 「南部(信順)の娘であれば、以前から話にも登っており、自分が手筈を整えた上で、後から島津齊興に伝えれば済むのだが」の意。齊彬は八百姫を將軍正室の最有力候補と見ていたが、別な候補を立てる必要に迫られて、篤姫にたどり着いた。

【資料紹介】

八戸藩「四品御昇進一件」(2)
歴史分野(本田伸・竹村俊哉)

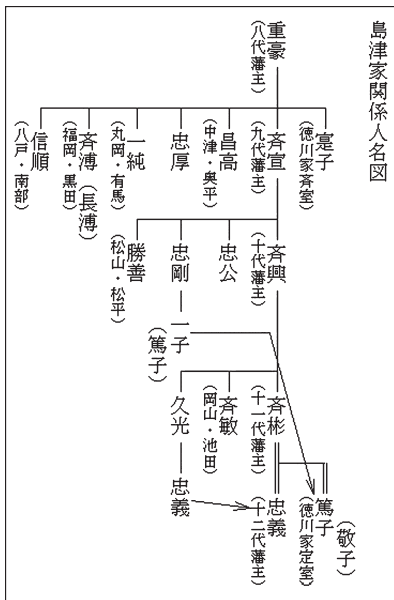
「四品御昇進一件」は、天保九年(一八三八)四月、鹿兒島の島津家から八戸南部家の養嗣子に迎えられた島津篤之丞(九代藩主南部信順)が、天保十三年の家督相続から十三年後の安政二年(一八五五)に従四位下昇進を果たした際、八戸藩の江戸留守居役が作成した儀礼の記録である。本年度は下巻を取り上げた。

文政年間、八戸藩では、八代藩主南部信真の信任を受けた野村武一が「御主法替」と呼ばれる改革を進め、産物会所の「御調役所」を中心に大豆や鉏(荒鉄)の専売制を施して商業・流通を活性化させた。これにより藩財政は安定したが、大規模な「稗三合一揆」が起こるなど、信真の治世は明るい面ばかりではなかった。中でも後継問題は悩みの種で、長男の信経は天保四年十月に死去し、次男信一も同八年十一月、江戸藩邸で死去した。相つぐ嫡子の早世に、良縁を求める必要に迫られた。

一方の島津家では、信順の姉寔子(広大院)を十一代將軍徳川家斉室とするなど、縁戚拡大策を進めていた。広大院の弟三人は藩主(中津・奥平昌高、福岡・黒田斉溥、八戸・南部信順)、妹四人は藩主夫人(桑名・松平定和、大垣・戸沢氏正、郡山・松平保興、新庄・戸沢正令)である。信順の実父重豪は生前、信順の縁組先に十萬石以上の大身を望んでいたが、広大院や藩主の島津斉興(信順の甥)は、信順が大名に列せられる点を重視した(『青森県史資料編 近世5 八戸藩領』第八章 二〇一一年)。

信順の婚約者鶴姫(信真の八女)は、わずかに二歳という幼さだった。正式な結婚は嘉永三年(一八五〇)六月で、信順の婚礼調度品「菊牡丹唐草轡十字紋蒔絵漆器」一三点には島津家の家紋「轡十文字」があしらわれ、鶴姫の婚礼調度品「唐草南部鶴紋蒔絵漆器」一两点とともに八戸市博物館に展示されている。しかし、二十二もの年齢差があつたため、周囲は早くから、信順に側室を持つことを勧めた。明治四年(一八七一)に家督を継ぐ長男栄信など二男四女は皆、側室との子である。鶴姫は後に江戸から八戸に移り、元治元年(一八六四)十二月、八戸で死去した。なお、信順の長女八百姫(島津貴敦室)は、島津斉彬により、十三代將軍徳川家定の正室候補に挙げられたこともあつた(『芳即正「天璋院入興は本来継嗣問題と無関係」『日本歴史』五五一 一九九四年 ↓参考)。

信順は文久元年(一八六一)に侍従へ昇進した。相つぐ家格上昇が島津家との縁に拠つてもたらされたことは疑うべくもなく、その点は、本書中にたびたび出てくる「両敬」の文言からも窺い知ることができる(大名間における両敬関係の問題については、松方冬子「両敬の研



究」『論集きんせい』一五 一九九三年)に詳しい)。それは信順個人の交際範囲の広がりを示すだけでなく、大名間での八戸南部家の認知度アップをも意味するからである。

近年、信順が法華信仰を通じて、斉彬や十三代將軍家定の未亡人天璋院(敬子)・斉彬養女(近衛忠熙養女)に影響力を持った可能性が指摘されている(長倉信祐「天璋院篤姫の法華信仰をめぐる」島津斉彬と南部信順の関係(交渉)を中心に」『印度哲学仏教学』二四 二〇一〇年)。さらに、明治七年七月、京都から東京へ戻った静寛院宮(皇女和宮、十四代將軍徳川家茂室)のために政府が麻布市兵衛町の旧八戸南部家邸を買い取り居住させるなど、將軍奥向との関係も注目される。今後、こうしたさまざまな点から、島津家と八戸南部家の関係をさぐるアプローチがなされることを期待する。

最後に、資料を提供された八戸市史編纂室の藤田俊雄氏、八戸地域史研究会の三浦忠司氏、及び関係各位に対し、記して謝意を表したい。

【凡例】

- (1) 助詞「江」「今」は、ひらがなで「へ」「より」とした。「者」「而」はそのまゝ用いた。
 - (2) 校訂者注は、当該の字句の脇に()で示した。
 - (3) 原文書にある付箋・貼紙などは※で位置を示し、「」に内容を記した。
 - (4) 本文中の台頭・平出は行わなかった。闕字については字間を詰めた。但し、儀礼の書式に関わる場合はその限りではない。
- 【所蔵】 青森県立図書館(第四七〇四九号)
- 【分類】 貴重 二二二・一